

直言

懸案の盧泰愚・韓国大統領が来日し、いわゆる「天皇のお言葉」の問題にも、それなりの決着がついた。

「天皇のお言葉」といっても、事前に政府・議会・政党間であれやこれやと調整した末のものなのだから、決して天皇ご自身のお言葉ではないし、このようなかたちで韓国の大統領が訪日するたびに、日本側の「謝罪」の身を濃くしていくといったパターンが定着することは決して好ましいことではない。

しかも、今回は、日本の朝鮮植民地化の過去について、韓国に対して謝罪するのであって、朝鮮人民全体に対してではないから、北朝鮮は除外されたことになる。

本当は、韓国が戦後、朝鮮戦争で大きな犠牲をこうむったのに、日本は糸へん、金へんの特需で戦後経済復興の基礎をつくり、今日

の経済大国になったという事実にこそ、多くの韓国民衆の割り切れなさや反日感情のもう一つのルーツがあるのだが、今回もこの点は全く素通りしてしまっている。

一方、わが国は北朝鮮、つまり朝鮮民主主義人民共和国とは国交もないまま、わが国のすぐ隣に二千万のもう一つの朝鮮の民衆が息づいていることを忘れている。

私は、この連休中に日本国際政治学会(東アジア分科会) 訪朝団として北朝鮮を訪れ、平壤に一週間滞在した。

金日成主席、金正日書記に次ぐ地位にいるという黄長燁・党中央書記兼朝鮮社会科学



東京外国語大学教授
中嶋 嶺雄

協会委員長らと膝を詰めて話し合ってきたが、北朝鮮の現実はやはり無視できないものであることを確認した。

一方、わが国政府は台湾とは断交したまま、今日の台湾がいわゆるNIEESの中でも最も安定的に発展し、いまや極めて知的水準の高い二千万住民がそこに存在していることも無視している。

台湾側は、韓国と異なって対日請求をあまりせず、じつと耐え忍んでいるからよいようなものの、いまやわが国の四分の一以上の貿易量を持ち、世界第二位の外貨保有国の台湾が反日に立ち上がったらどうするのか。

「天皇のお言葉」は台湾の二千万民衆に対して、当然向けられねばならないはずである。

台湾と北朝鮮も忘れてはならない